

学位論文題名

農村の内発的発展と地域づくり主体の形成

—北海道におけるグリーン・ツーリズムの事例分析をとおして—

学位論文内容の要旨

要旨

1990年代以降、農村の地域づくりのひとつの方法としてグリーン・ツーリズムが注目されている。本論文では農村の地域づくりにおけるグリーン・ツーリズムの意義として、地域の価値の再発見・再創造の契機を可能性として含んでいる点に着目する。その可能性に依拠したグリーン・ツーリズムによる地域づくりのあり方を明らかにすることが本論文の第1の課題である。また、このような意味でのグリーン・ツーリズムの可能性の現実化においては農村住民の地域づくり主体としてのあり方が必然的に問われる。その地域づくり主体を把握する枠組みとしてNPOなど特定の課題を共有する「協同型」主体、地域全体に関わる普遍的・公共的な課題を共有する「ネットワーク型」主体、両者を有機的に結び付ける「地域計画型」主体の3つの集团的主体の諸形態を区別し、それぞれの形成過程を明らかにするとともに、3者の関連を明らかにして総体的に把握することが第2の課題である。

本論文では、以上の2点を主要課題とし、北海道の諸地域におけるグリーン・ツーリズムの具体的事例の実証分析を行った。その章別構成は次のとおりである。

序章 課題と方法

第1章 地域づくりとしてのグリーン・ツーリズム

第2章 地域づくりとしてのグリーン・ツーリズムにおける実践的課題

第3章 「協同型」組織による地域づくり

第4章 「ネットワーク型」組織による地域づくり

第5章 「地域計画型」組織による地域づくり

終章 総括

序章では、上記のような問題意識と課題および方法を詳述した。

第1章では、先行研究に基づいて「地域づくりとしてのグリーン・ツーリズム」概念を掘り下げた。ここでは、第1に、農業・農村の多面的価値論を検討し、その多面的価値の実現過程は、本質的には人間の自己疎外の克服＝主体形成の過程であることを明らかにした。第2に、農業・農村の多面的価値の実現に基づく地域づくりの方法論的枠組みとして「内発的発展論」を位置づけ、その批判的再検討により、特に地域づくり主体の主体像と力量の内実を捉える枠組みを検討した。第3に、以上をふまえて農業・農村の多面的価値に基づく農村の地域づくりの具体的実践としてグリーン・ツーリズムを位置づけ、その固有の意義を検討した。そこでは、グリーン・ツーリズムの実体が農業・農村の多面的価値であることを明らかにし、その実践的な特殊性・固有性は都市・農村交流にあることを明らかにした。

第2章では、「地域づくりとしてのグリーン・ツーリズム」をより具体的に把握し、その実践的課題を明らかにするために標茶町の事例を分析した。標茶町では住民（農家）の組織的学習活動を基盤に地域づくりが展開されており、その過程にグリーン・ツーリズムの理念・実践が含まれている。この事例の分析

をとおして、地域づくりにおけるグリーン・ツーリズムの意義を具体的に確証するとともに、グリーン・ツーリズムを軸に据えた地域づくりを展開するためには「担い手の組織化」をめぐる実践的課題があることを示した。

第3章では、「協同型」主体の実践事例として鹿追町の事例を分析した。この事例において、実践者（農家）たちはファームイン実践という共通の生活課題に基づいて組織化し、学習活動とグリーン・ツーリズムの実践を共に展開していくなかで強固な協同関係を構築していた。そこではそれぞれに自らの生活課題に根ざして地域づくりを意識化し、課題認識を明確に共有していた。さらに、その課題認識は北海道ツーリズム大学という地域外の諸主体との学び合いによって、より本質的な次元へと深まっていた。しかし、地域内における多様な諸主体による協働・ネットワークの形成については課題を残していた。その課題の克服のためには、「協同型」組織における特殊な課題認識を地域内で共有可能な普遍性をもつ地域課題へと高めていくことが求められると示唆された。

第4章では、「ネットワーク型」主体の実践事例として別海町の事例を分析した。この事例においては、「多様性」を認めあうことが「ネットワーク型」主体の特徴ないし存立条件であり、そのつながりのなかで学習活動を展開することをとおし、地域づくりにおける一定の普遍的な課題認識が形成・共有されることが示された。しかし、ここにおける課題認識は抽象的なものにとどまり、個別の主体における具体的な課題認識とは必ずしも結びついていない。したがって、多様性の保持と、具体的かつ普遍的な課題認識の形成・共有との両立が「ネットワーク型」主体の限界ないし発展課題として示された。ここで、先の「協同型」主体と「ネットワーク型」主体は相互補完的でありながらも本質的に相互対立するという矛盾が明らかとなった。この矛盾を克服する実践を担うものとして想定したのが「地域計画型」主体である。

そこで、第5章では、「地域計画型」主体の実践事例として長沼町の事例を分析した。この事例では、地域農業の危機という地域課題に対し、行政・農協と住民が協働で取り組む過程を経て、農業振興計画・地域づくり計画のひとつの軸としてグリーン・ツーリズムが展開していた。その背景には（特に農家女性に象徴される）地域課題を真正面に据えた社会教育活動と生産・生活の場における実践が有機的に結びついていくなかで、地域住民の課題認識が個別的に具体化されると同時に地域的に共有されていく過程があった。地域づくり計画においてその過程を総括することにより、多様な実践サークル・グループ（「協同型」主体）の活動と、多様な諸主体およびきわめて多くの地域農家によるネットワーク活動（「ネットワーク型」主体）が有機的に結び付きながら「地域づくりとしてのグリーン・ツーリズム」を展開することが可能になっていた。

終章では、次の2点を主要な結論として指摘した。第1に、「地域づくりとしてのグリーン・ツーリズム」はその実践過程に、担い手たちが都市・農村交流を主要な契機とする地域および自己を再発見する学習と、自己形成し他者と協同・協働して地域をつくる主体となっていく過程を内在することによって現実化する。第2に、「協同型」「ネットワーク型」「地域計画型」の3つの形態の関連は、特に「地域計画型」主体の形成過程に即していえば、その条件として①地域課題を自己の生活課題として意識化する学習活動、およびその課題に対して取り組んでいく具体的実践の展開過程（「協同型」主体の形成）と、②自己の生活課題を地域課題としてそれぞれに提起することで他者と共有し協働して取り組んでいく過程（「ネットワーク型」主体の形成）、そして③両者を総括する実践としての「計画化」実践が必要である。「地域計画型」主体は、狭義にはこの「計画化」実践を直接に担う主体であり、広義には「地域づくり計画」を具体化しつつそれに内容を与える「協同型」主体、および「地域づくり計画」と「協同型」諸主体とを媒介しそれに実践的形式を与える「ネットワーク型」主体の総体である。「地域づくりとしてのグリーン・ツーリズム」を担う「地域づくり主体」とは、このようにして理解される。

学位論文審査の要旨

主 査 特任教授 鈴木 敏 正
副 査 教 授 宮 崎 隆 志
副 査 教 授 橋 本 信 (拓殖大学北海道短期大学)
副 査 教 授 坂 下 明 彦 (大学院農学研究院)

学位論文題名

農村の内発的発展と地域づくり主体の形成

—北海道におけるグリーン・ツーリズムの事例分析をとおして—

低経済成長期に入って、農業・農村がもっている生態環境保全や生活・文化的価値等の多面的価値が見直され、欧米諸国ではアグリ・ツーリズムやスローライフ運動など、地域個性的な農業・農村の価値を重視する諸運動が展開されている。こうした中で本論文は、北海道のグリーン・ツーリズム運動に着目し、それらを都市・農村の交流を契機とした、農村の「内発的発展」をめざす実践として捉え直し、社会教育学的視点から、学び合いをとおした「地域づくり主体」の形成過程として理論的・実証的に分析したものである。

本論文の理論的な独自性は、第1に、農業・農村の多面的価値を現代人の自己疎外克服の視点から捉え直していることである。すなわち、経済的価値優先を人間的活動(労働)の疎外と捉え、それを克服しようとする諸活動を、人間-自然的関係価値の回復をめざす生態環境的価値、コミュニケーション的な人間-人間的関係価値の回復をめざす社会的・文化的=生活価値、そしてそれらを総合し、人間存在的価値を回復する総合的価値としての類的価値とに整理しながら、疎外論的視点から体系的に捉え直している。これによって現象的な「多面的」価値論を克服する構造的把握の方向を示している。

第2に、こうした活動に不可欠な学びの過程に着目し、主としてグリーン・ツーリズムの運動を進める農業者が、実践をとおして「地域づくり主体」となっていく過程を、協同型・ネットワーク型・地域計画型の3形態に区分し、それらの相互関連的関係の展開として分析していることである。この枠組みによって、地域によって多様に展開するグリーン・ツーリズムの差異をふまえつつ、全体的に把握することが可能となると同時に、同じ地域においてもこれらの諸形態が関連し合っている実態を解明することが可能となっている。

第3に、内発的発展論への問題提起である。従来、地方財政学や地域経済論あるいは国際開発論の領域で議論されてきた内発的発展論は、日本の地域づくりの実践を支える理論として大きな役割を果たしてきた。しかし、内発的発展論では、地域づくりの担い手形成における学習活動の重要性の指摘があったとしても、その実践過程の分析はほとんどなされてこなかった。その点で本論文は、地域づくり実践に不可欠な学習実践に視点をおき、都市住民(子どもを含む)と農業者の交流をとおした学びを含めて、内発的発展論における欠落を補いながら、「地域づくり主体」の形成過程を分析したものとして評価される。

実証的には、まず第2章で、標茶町における「地域づくりとしてのグリーン・ツーリズム」の活動を取り上げ、グリーン・ツーリズムの実践が当面している諸課題を明らかにしている。とくに「地域づくり基礎集団」の形成から「グリーン・ツーリズムネットワーク」形成への展開過程をふまえ、「地域づくり主体」形成への課題を具体的に示している。第1章の理論的検討と合わせて、グリーン・ツーリズムを取り上げる筆者の視点をより説得的にしている。

続く3つの章で、上述の「協同型」「ネットワーク型」「地域計画型」を主とする実践が展開されている地域、すなわち鹿追町、別海町、長沼町でのグリーン・ツーリズム実践が取り上げられている。これらは北海道におけるグリーン・ツーリズム実践展開の時代的変遷を示していると同時に、畑作・酪農混合地域、酪農専業地域、稲作中心地域といった地域農業の差異をも反映しており、北海道のグリーン・ツーリズムの全体的動向を示すものとなっている。

第3章では、「協同型」の鹿追町ファームイン研究会および北海道ツーリズム協会の実践過程、とくに農家実践者たちがみずからの生産・生活課題解決のための取組からはじまり、それぞれのグリーン・ツーリズムの実践に伴う学習と、仲間同士の協同の学び合いをとおして、地域課題を認識して行く過程を詳細に分析している。その実践は全国的なネットワークをつくるどころまで発展したが、地域内の他農家や農協、あるいは農家以外の住民との合意形成が課題であるとされている。

第4章では、「ネットワーク型」の別海町グリーン・ツーリズムネットワークの活動が取り上げられ、農業普及センター職員などが媒介役となって展開されている、多様なグリーン・ツーリズム実践のネットワークと学習活動が分析されている。しかし、その活動は形式的・抽象的な地域課題認識にもとづくものであり、メンバー個々の状況との有機的な結びつきに欠けていることが指摘されている。

以上の2つの事例分析をとおして、「協同型」と「ネットワーク型」は互いに補い合う関係にありながら、矛盾・対立する側面があることが明らかにされている。この矛盾・対立を克服する方向をさぐるべく、「地域計画型」の実践として第5章で取り上げられたのが長沼町の「地域づくりとしてのグリーン・ツーリズム」である。それはリーダーと農協・行政によるトップダウン的な組織化・計画化としてはじまったが、実践過程において重要な役割を果たしたものとして、社会教育活動や農協の組織活動で生まれてきた女性を中心とする協同活動があり、その実践がグリーン・ツーリズムの内実を作っていること、関連するネットワーク活動が地域計画と協同活動を媒介する役割を果たしたことが解明されている。そして、「協同型」と「ネットワーク型」の諸主体が相互発展的循環をつくることにより、「地域計画」型実践が現実的に展開し、地域づくり主体の形成へと発展して行くプロセスが示されている。

かくして終章では、グリーン・ツーリズムの3形態は、相互の矛盾を不断に克服しつつ、かかわる労働とコミュニケーションを蓄積しながら、互いに創造し創造される動的なトライアデ構造をなすものと結論づけられている。

以上のように本論文は、より立ち入った学習内容・学習過程分析、内発的発展論に対するあらためての理論的提起などに課題は残っているが、社会教育学的視点からグリーン・ツーリズムの本質と諸形態の分析に新機軸を提起したものとして高く評価できる。

よって著者は、北海道大学博士（教育学）の学位を授与される資格があるものと認める。